

尾張藩戸山荘の眺望に関する研究

1 はじめに

双六の絵図で出来たる御庭也（天明四年刊）⁽¹⁾

一日にみやこへのぼるいい御庭（文化五年刊）⁽²⁾

駒下駄で越すハ御庭の箱根山（文化五年刊）⁽³⁾

上は江戸後期の川柳に詠まれた句である。三つの句に「御庭」と言われているのはいずれも尾張藩の下屋敷―戸山荘と解釈されている。⁽⁴⁾ 少なくとも川柳の中では江戸庶民に「御庭」の名で親しまれた戸山荘は寛文一一年（二六七二）、尾張藩二代藩主徳川光友が將軍家から土地を拝領し、下屋敷として造営したのがはじまりである。⁽⁵⁾ それ以後も隣接地を受領し、抱え屋敷をあわせ一三万六〇〇〇坪（四四・九ヘクタール）となった。近世の大名庭園のなかで最大の敷

地面積を誇っている。

この「双六の絵図で出来たる御庭」はいったいどんな景観を持っていたのであろう。従来の戸山荘研究は、庭園内部の景観と歴史的変遷の究明に成果をあげた。⁽⁶⁾ それらによると、園内には山あり谷あり、川や滝がある。数多くの社寺堂塔、御茶屋、農家などを包括していた。特に東海道五十三次の景―小田原宿の街道を縮景して表現したのが戸山荘の特徴である。まさに「一日にみやこへのぼるいい御庭」という川柳に表現されるように、東海道沿いのいくつかの名勝を見立て、それらを一つの庭園内に収めた。庭園内をめぐることで、「二日で江戸から都へ上ることができ」という疑似の旅体験をさせるわけである。

しかし、庭園の立地および庭園からの眺望景観に関しては、ほとんど注目されなかった。実は、庭園外部の景観も造園当初から重要

李 偉

視されてきた。戸山荘の園内からの眺望風景として富士山を巧みに取り入れるのが、江戸後期に「江戸百富士」に選ばれるほど名声を博した。庭園内外の景観を調和させるための工夫を疎かにしなかったことこそ戸山荘の造園意匠として評価すべきではないかと考えている。

戸山荘の全体的景観構成を理解するには眺望についての検討が不可欠であろう。御三家の筆頭である尾張藩を取り巻く造園事情、戸山荘の独特な眺望手法と成立要因を分析することにより、庭園景観に潜む大名達の審美感覚、景観構成の仕方がわかってくるであろう。江戸時代の名園評価の基準を理解する上で、戸山荘は重要な意味を持っている。御三家と称される尾張・紀伊・水戸の徳川家の庭園は、政治との深い関連で、ただ愉楽の空間のみならず、江戸の都市計画と深く関わっている点で特殊であり、近世における大名庭園の性格を再検討する事例として庭園史のみならずさまざまな興味深い問題を内包する。本稿では、その一端を戸山荘の眺望施設に注目して解明しようと試みるものである。

2 戸山荘の立地

江戸の都市的実態を正確に捉まえるために、もつとも重要な方法の一つは、都市の地図的表現によることである。江戸時代には切絵図を代表としたものは数多く作られたが、殆ど案内図的なものであ

るため、精密な地形図は見当たらない。ここで、安政三年（一八五六）の切絵図と現在の地図をもとに作られた「復元・江戸情報地図」⁽⁷⁾（図1）、および「明治・大正・昭和東京1万分1地形図集成」⁽⁸⁾（図2）などの地図を利用しながら、戸山荘の位置と地勢を確認したい。「復元・江戸情報地図」は江戸時代の戸山荘の復元図に現在の地図を重ねて作られたものである。戸山荘の位置した場所を確認すると、庭園は江戸城西北に位置し、武蔵野台地の起伏に富んだ地形を生かして築造されたことがわかる。富士山はちょうど戸山荘の西南方向に眺望できた。戸山荘は武蔵野台地に位置し、東は牛込、南は大久保、西も大半は大久保、西北は諏訪村、北は高田より牛込馬場下町に接する一帯を占めていた。地形の変遷に関しては、武蔵野台地は畑作が多かったため、原地形が比較的長く続いていたと指摘されている。⁽⁹⁾

「明治・大正・昭和東京1万分1地形図集成」は戦後の復興期に測量された地図で、地形の高さを数字で各所に記入している。戸山荘の地勢を見るには役に立つと考えられる。「箱根山」と標示されたところに四四・六mの文字がある。隣の戸山団地の高さの表示は二九・八mと三〇・一mがある。同じ図面に西南方向に三五・四mの高さが記されている。この図面によれば「箱根山」は戦後まもなく、同地域で一番高い存在であったことが確認できる。

冒頭にあげた川柳の「駒下駄で越すハ御庭の箱根山」にある「箱



図1 復元・江戸情報地図（児玉幸多監修 1994 朝日新聞社）部分

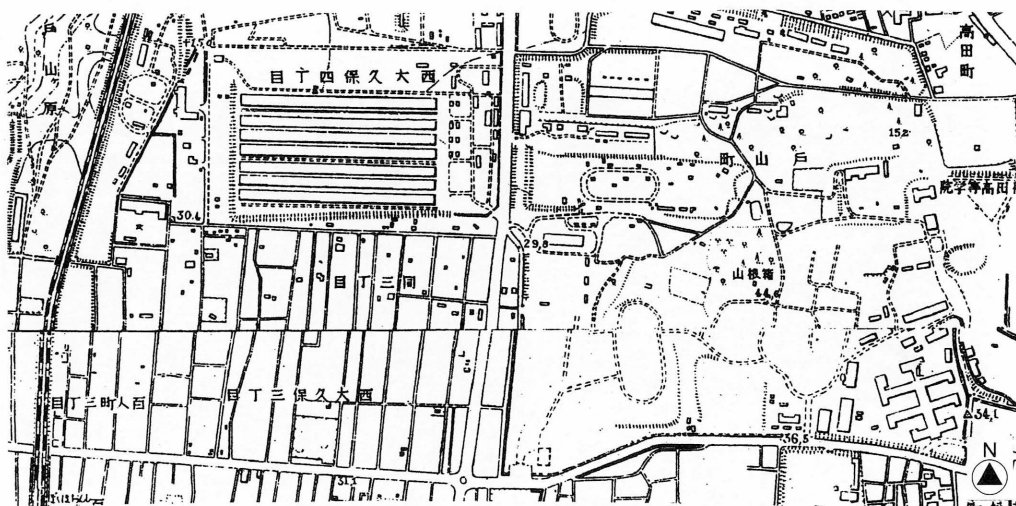


図2 明治・大正・昭和東京1万分1地形図集成 (1983 柏書房) より作成

根山」は、戸山荘内の築山である。江戸一の広さを誇った戸山荘は、今この小高い築山だけが残され、戸山公園の一角に位置し、昔の栄光を偲ぶことができる。箱根山の成立について、庭園の池を掘る際、揚げた土で築かれた人工の山だと伝えられている。宝暦年間の絵図(図6)では「丸呂ヶ嶽」と記載されており、その後の絵図では「玉圓峯」と称されたこともある。

図3の「大江戸地理空間図」⁽¹⁰⁾は幕末(嘉永・慶応頃)の切絵図を、明治初期の参謀本部陸地測量部発行の二万分の一迅速図(一八八〇―一八四)に転写し、また明治初期の測量による海拔高度を添え、さらに洪積台地の崖線などを加えて作成されたものである。作者の正井氏の分析によると、江戸の大名屋敷は麹町台地の先端にある江戸城を中心としてその周囲に造成され、大名邸の上屋敷は江戸城前面の低地に集中した。市街地の外側には中屋敷、下屋敷が設けられた。下町では川沿い、海手では埋立地の海辺に造成、山の手では地形の変化を利用した庭園も作庭されたのである。特に台地に入り込んだ谷戸を取り囲んだ屋敷では、そのような特徴が顕著であったという⁽¹¹⁾。眺望に適している台地に屋敷を構えたのは赤坂にある紀州徳川家の西苑、小石川にある水戸徳川家の後楽園などがあり、今回の研究対象である尾州徳川家の戸山荘もその一例である。

図面に、四四・六mの「築土」と表示されたところは今の「箱根山」であろう。当時の御城天守閣は二九・六m、飛鳥山は二七・二

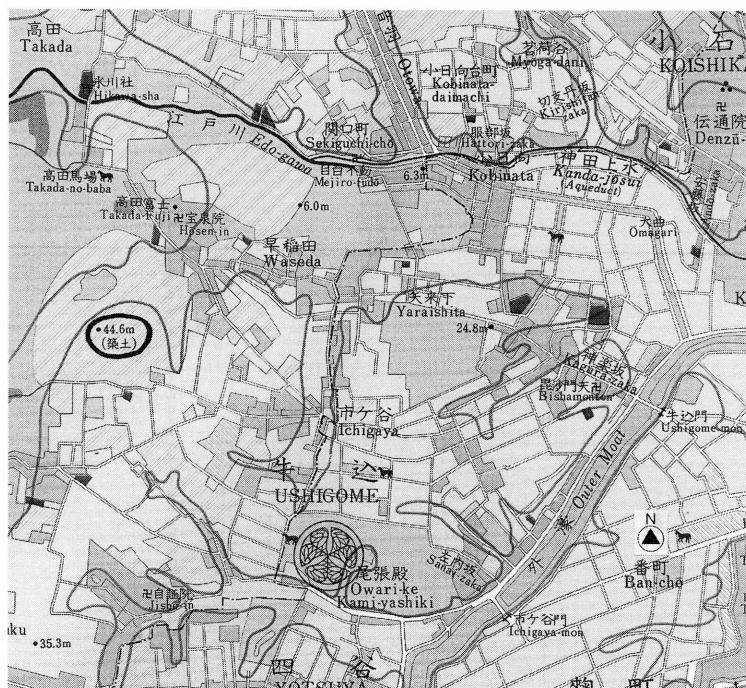


図3 正井泰夫 大江戸地理空間図（古今書院 2000年）部分

m、水戸殿上屋敷の見越山は二・五mと記している。それらに比べ、「築土」は遙かに高く、地域の最高峰であった。「築土」は戸山荘庭園の中心部に位置し、景観を俯瞰する絶好の場所であるはずだが、寛政年間の記録では昔は見晴らしがよかったが、今は木が大き

く茂ったため園内の景色すら見えなかったという⁽¹²⁾。しかし、弘化四年（一八四七）の文献には、玉圓峯からの眺望絶景が「くまなく見えわたり」と記録された⁽¹³⁾。おそらく江戸後期になって、見晴らしのため、玉圓峯の景観が整備されたと考えられる。

戸山荘の成立当初の記録がきわめて少ないのはすでに先行研究の指摘したとおりである⁽¹⁴⁾（戸山荘に関する史料は表1参照。明治時代に編集された小澤圭次郎の「園苑源流考」の中に尾張藩の役人による記録が掲載され、戸山荘景観の由来、ならびに各景観の成立年月、旧呼称などが詳細に記録されている⁽¹⁵⁾）。これらの記録によると、建物のほとんどは寛文十一年（一六七二）から延宝年間（一六七三—一七八二）の間にできたことがわかる。文献の中に朱色で表示された役人の添筆によると、享和三年（一八〇三）に古駅楼など御町屋あたりは類焼に罹り、文化文政年間に部分的に修復されたという。また宝暦、寛政年間の戸山荘図と享和以後の図とを対照してみると、主な建物の位置は大きく変わっていないことが確認できる。庭園の築造以降、部分的な変化は認められるものの、池泉や築山など基本的な地形や主要部分の施設は、初期に完成したと見てよいであろう。つぎに、史料の分析を通して、餘慶堂を中心とした戸山荘の眺望景観を考察してみよう。

3 餘慶堂の命名と内部施設

戸山荘の眺望に関しては、吉河功の論文「戸山莊庭園の特色と景勝」に「見晴らし園」の特色が指摘されているが、しかし戸山荘の景観紹介を主目的とするこの研究は、戸山荘の眺望景観がもつ歴史的意義に関しては触れなかった。

餘慶堂は建立当初の建物であることはすでに多くの記録から確認できる。餘慶堂の名前の由来について、蓬左文庫所蔵の戸山莊記録に江戸後期の磯谷正卿が「豊山二十五景」の詩を綴り、中に餘慶堂を詠む詩が建物の名前の由来をよく語ってくれると考える⁽¹⁸⁾。

富岳三千丈 応知積善同 故餘無數慶 長滿此堂中（富岳は三千丈に達し、善の蓄積は同様であろう。ゆえに無数の喜びが残り、此堂の中に長く満ちている。訳は筆者）

「餘慶」という言葉の初出は《易経・坤卦》に見られる⁽¹⁹⁾。「積善之家、必有餘慶」という言葉は中国で広く親しまれている。つまり善を積み重ねている家には、ただ一身のみならず、子孫まで及ぶ幸いがある。餘慶堂の命名も善行を勧誘する儒教的意味が含まれていたであろう。餘慶堂の様子を詳しく記録した史料に『戸山御屋敷御取建以来伝聞之記』と『和田戸山御成記』⁽²⁰⁾がある。この二つの史料

を利用しながら、餘慶堂内部の様子を確認したい。

寛政五年（一七九三）に三上季寛が残した『和田戸山御成記』には、餘慶堂は庭園全体の東南に位置し、御殿から二本の廊下でつながっている大きな書院であると記され、「あけ部御簾かけの具などまふけさせ給ひて」と部をあけるため、簾をかける工具を設けることが書かれている。同じ部戸に関する記述には『和田戸山御成記』より四四年前の寛延二年（二七四九）に、御屋敷奉行水谷友之右衛門の記した随行記がある。水谷によるこの伝聞の記には、部戸が開け放たれていたと記された。部戸を開けることは園内あるいは外の空間を眺めることを意識しながら記録されたことが想像できよう。

餘慶堂の内部に関して、四四年も離れた二つの記録に生花の種類は違うものの、調度品類は大きく入れ替えがなかった。上段の間は將軍の御座所とし、書院床の間には狩野養川の福祿寿と山水の三幅の掛け軸を掛け、大なる唐かねの砂鉢を置いてあった。二の間には文震孟が隸書で書いた「餘慶堂」の額があり、雪舟の掛け軸の山水画を掲げ、机に唐銅獅子の香炉を置いた。後之間に越雪湖の梅の絵などが飾られ、御湯殿に狩野探幽が六五歳の時の作品に、林和靖・李太白を描いた二幅の掛け軸を掛けていた。御三家の筆頭に相應しい品揃えであり、水谷友之右衛門が「皆いみしき世に稀なる物なり」と感嘆したとおり、珍しい調度品が調えられた。



図4 餘慶堂の図 外山御庭之図（享和元年 1801 国立国会図書館蔵）

図4の「外山御庭之図」（享和元年一八〇一）に餘慶堂の模様が描かれている。建物の正面から庭を見られるように描かれている。この庭は餘慶堂に所属している小さな庭で、清楚な敷石で広い園内へと導かれている。画面の右下に「富士見」と書かれている。当時の建物の名称を書いているのか、あるいは書院から部戸を開け、富士山を見ていたことを強調するのは不明であるが、富士山の観賞は餘慶堂の重要な見どころであることは想像できよう。

4 戸山荘の眺望景観

享保二〇年（一七三五）三月に戸山荘で花見の園遊が行われた。久世舎善は「戸山御庭記」（大田南畝写）という文献に「名に高き戸山の御館へ花見の御ゆるの御供にまかりて、御庭の景色もあらまし見侍りしに」と記した。久世舎善は七代藩主徳川宗春の臣であり、この記録は戸山荘で園遊会をした時の随行記である。花見の園遊とともに餘慶堂の景勝も描かれた。久世舎善の記録によれば、享保二〇年の時期に戸山荘はすでに高い名声を博した。御庭の景色をたいたずらに見るのも口惜しく、また他日に友達に語り伝えるため、紙と筆を持ち、景勝を記録した。それにも見落としたところが多く、ほんの大海の一滴しか記録できなかったという。当時尾張藩士であっても簡単に出入りできない戸山荘を見学できること自体、一種の名誉と見られるであろう。

文震堂の「餘慶堂」の額

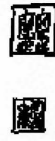


図5 文震孟の「餘慶堂」の額（福田助左衛門擬書
名古屋市蓬左文庫蔵）

（前略）「爰に餘慶亭と御額かかりたる御殿あり。景色一しほ勝れたり。又富士山の御殿ともいふよし。」⁽²³⁾と記され、餘慶堂の眺望に関する大事なヒント

がこの一文から見出せる。ここに餘慶亭という額が掛けられ、景色が勝れていることが記されている。また餘慶亭という額の掛かったこの建物は「富士山の御殿」ともいうらしい。大事なことは「富士山の御殿」という表現が出てきたことである。江戸の高所から富士山を眺める記録は少なくなかった。しかし主に記録されたのは富士見坂、両国橋、武蔵野、江陵金地など物見遊山の名勝地からの眺望であった。戸山荘の餘慶堂のように、大名家の建物自体が「富士山」という名称を冠したのは稀な例である。下高田村の富士見茶屋は同じく建物からの富士眺望で特徴付けられたが、餘慶堂より遙かに後の文化九年（一八一二）ころに成立した景観である。「富士山の御殿」という呼び名で餘慶堂の景観特徴を表したものと想定できる。

戸山荘からの眺望景観が江戸後期に「富士百景」に選ばれたのもこうした建物の眺望機能との関連が考えられる。図5の額は文震孟が書いた「餘慶堂」の擬書である。文震孟（一五七四—一六三六）は明の蘇州出身の大学士である。

同じく「戸山御庭記」は、餘慶堂からの眺望景観と建物との関係に大きな手がかりを提供した。「西南を正面にうけ、かけ造りにて、前に御しき舞臺あり」と書かれ、餘慶堂の正面は西南方向に向いていることがわかる。西南方向はちょうど富士山が見える方向に当たっている。この記録から、餘慶堂の建築当初、富士観賞がすでに考慮に入れられていたことが推測できる。「御座所よりむかひて富士山きと見えたり。見わたしたるかきり」と、上の間の御座所より向かい側の富士山がきりりと見えたり、遠く見渡すことができたのであろうという。そのために、

大きな松の木立しけりあひたるを、枝をため葉をならへぬるにや、中くほにいと平かに作りなして、むかふさまに富士をのせたるかと見ゆ。⁽²⁵⁾

大きな松の枝を切り払い、真ん中を窪むようにするなど、富士山を松の上に載せるように工夫された。その巧みなさま、筆にも及びがたく、言葉にも述べがたいという。餘慶堂から遠望した富士山は、

ちようど緑の松の上に白い扇子を載せたような巧妙な仕組みだという。

白扇倒懸東海天といふ石川丈山も、此所にては白扇直懸戸山松とやいひなまし。まことに積善の餘慶亭なり。⁽²⁶⁾

「白扇倒懸東海天」の名句を作った石川丈山は、もしこの景色を見たら、きっと「白扇直懸戸山松」と詩を書き換えるであろうと餘慶堂の遠望景観を絶賛した。ここに書かれた石川丈山（二五八三一—一六七二）は、近世漢詩人の代表者の一人である。儒学を藤原惺窩に学び、文人や書家でありながら、京都の詩仙堂を構えた築庭家でもあった。「白扇倒懸東海天」は石川丈山が一六二三年に書いた漢詩の「富士山」にある名文句である。⁽²⁷⁾ すなわち、これは、日本の空高く、白絹を張った扇が、さかさまに吊り下げられた形である。

富士山を扇子に喩える表現は、江戸時代の漢詩文の中でよく見られる。庭園の眺望に関する文献に富士山の表現を調べると、「戸山御庭記」の他にも富士山を扇子に喩えた文句がいくつかあった。寛永一〇年（一六三三）に書かれた「佐久間親衛校尉別墅十景」⁽²⁸⁾と寛永一六年（一六三九）の「観物園記」に保科氏新銭座邸庭園の富士遠望に関して、いずれも富士山を「銀扇」に喩え、さかさまに吊り下げた形とした。明らかに石川丈山の「白扇倒懸東海天」の影響が

見られる。

久世舎善も富士遠望を「白扇直懸戸山松」という文句を作った。戸山の松に扇を直ちに掛けたように富士山が載っているという。扇子のような富士に加え、戸山荘の松を強調することが読みとれる。ここで、松に手を加える工夫をしたからこそ、こういう表現が生まれたと思われる。

まことに積善の餘慶亭なり。千代も猶榮へん君か庭の面の松のはごしにみゆるふしの根⁽³⁰⁾

と記述されるのは、積善の餘慶亭と君の千代猶榮を連想させ、富士山の景色に忠君の儒教的意味を付与するためでもある。「松のはごしに」のところに、また戸山荘の松を強調するように見られる。この「松」は餘慶堂の眺望にかかわる大事な道具として、ある意味で眺望の性質を定める存在ともいえる。餘慶堂の眺望は借景と言えるかどうかは後に分析するが、ここで園外を眺望するため、松の造形を利用したことが明らかになった。戸山荘の松は「額縁」効果を果たした。借景の用語を借りていえば、戸山荘の松は見切り（中景）に当たる。

「戸山御庭記」には餘慶堂のほか、ほかの施設からの眺望に関しても記述がある。たとえば臨遙亭からは庭園周辺の景を見回すことが

できたという⁽³¹⁾。小石川台地、筑波山など地形の高い所から眺望ができた記録は他の園遊記にもよく見られるが、ここで興味深いのは「民のかまと」など身近な生活景観も観賞の対象になっていることである。江戸中期から庭園観賞に値するものは歴史的「美景」だけではなく、こういった「雑景」も視野に入れる傾向が見られる。

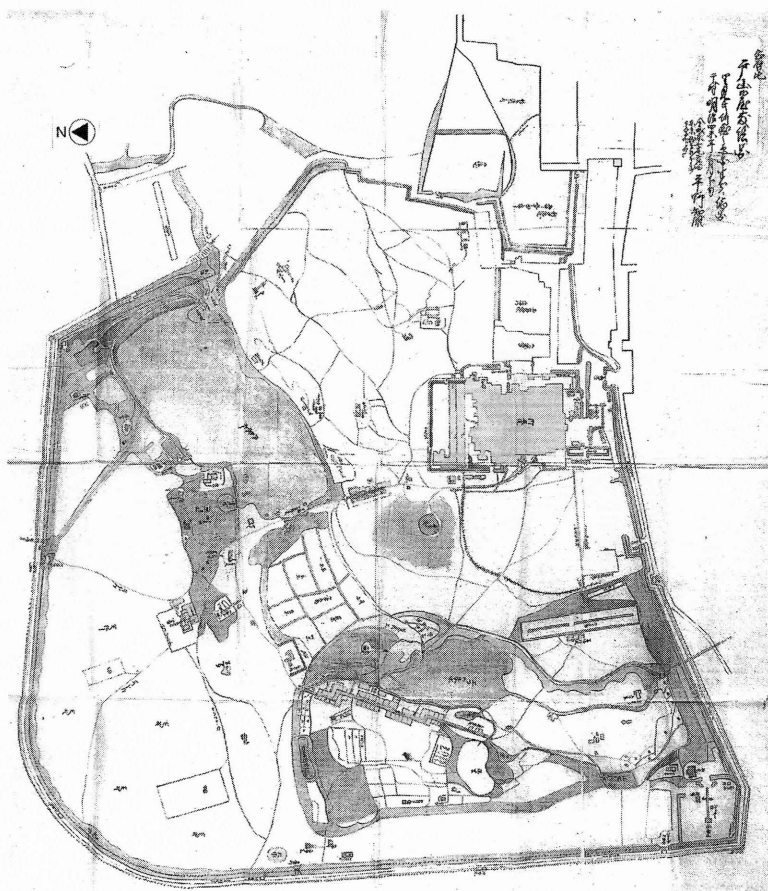


図6 宝暦頃戸山御屋敷絵図（東京市史稿より）

戸山荘の最盛期を特徴づける重要な人物として尾張藩七代藩主の徳川宗春（藩主在職一七三〇—一七六四）と一代將軍の徳川家斉（將軍在職一七八七—一八三七）の存在を忘れるわけにはいかない。宗春は幕府の儉約政策に真向うから挑戦するかのよう、財政積極論者として派手な生活を自らも楽しみ、消費生活を主張し、経済の活性化を図ろうとした。尾張で遊里の営業を許可し、芝居上演の禁も緩めた。江戸では吉原の遊女春日野を連れ出して、戸山荘へ囲ったという話もある。こういった派手好みで、豪放な性格をもつ宗春の趣味が、最盛期の戸山荘に投影されたと考えられる。

最盛期の戸山荘を描いた絵図に「宝暦頃戸山御屋敷絵図」がある（図6）右上の墨書きによれば、この絵図は明治四年（一八七二）、旧家臣の平野知雄が宝暦頃（一七五一—一七六四）の絵図を縮図にして写したものである。

一方、寛政年間の一代將軍家斉は、田沼意次を排して、松平定信を老中主座とし、学問を奨励、寛政の改革を行わせた明主である。五〇年間にわたり文化・文政の江戸文化爛熟期に君臨した。私生活の面では、家斉は贅沢な生活を好み、ことのほか庭園がすきだった。『続徳川実紀』には、家斉がいかに庭園に関心が深かったかの記録が残されている。

或とし御政事のいとま。近習の者して御小座敷の庭に假山を作らしめ。盆池を設け魚を放ち。草木をも心有さまに植なし給ひ。⁽³²⁾

政事の暇、自分の邸宅に庭を作らせた。假山を造らせ、池を設け、魚を放って、草木を植えたりした。しかし、将軍があまりにも庭園に関心を持ちすぎるのを側近たちは心配した。

御側用人松平伊豆守信明謹で申上しは。いかにも御物数寄残る處なく出来仕たり。併かかる瑣細の假山盆池をもつて。御心を樂しめたまふことは。恐ながら狭き御ことなり。天下国家を治め給ふ御身にては。海内の山岳滄海みな御庭もおなじことなり。⁽³³⁾
(中略) はばかりず諫め奉りしかば。

側用人の松平信明は次のように諫めたという。いかにお庭が綺麗に巧妙にできて、心を樂ませることができて、それは天下国家の責任を一身に負う将軍にとっては些細なことである。この国の山岳滄海はみな将軍のお庭であると見なす胸襟が必要であろうと憚らずに信明が諫めた。

周囲の多くは将軍に直言することを憚る気分が強いなか、こうした率直な諫言は将軍にとってきわめて新鮮で、直言した信明はむしろ

る忠臣に見られたに違いない。たしかに信明はその後大抜擢されたようだ。しかし、決して将軍の庭園趣味は止むことなく、むしろ拡大していった。家斉が御三家の屋敷を始め、蒲生家、内藤家、酒井家、前田家など諸大名の庭園を訪れる中、園遊会をおこなった記録が残っている。将軍の御成を準備する一環として、大名たちは庭園の整備を図り、江戸には造園のブームが起こった。

江戸の名園を数多く目にした中、家斉は「すべて天下の園池は当にこの荘をもつて第一とすべし」⁽³⁴⁾と戸山荘を絶賛した。特に戸山荘の景観が気に入ったようである。家斉は実によく戸山荘に足を延ばしたことは記録からも明らかである。

寛政十年の記録である「とやまの紅葉」によれば「寛政のはしめより、四度はかりに成にたれと、いつも花の春のみなりしを、こたひは、小くら山ならねと、ころある紅葉に、(後略)」とある。それまではいつも春の花の頃の訪問であったが、今回は秋の園遊である。「とやまの紅葉」は寛政一〇年(一七九八)に書かれた随行記で、家斉は寛政五年(一七九三)に戸山荘をはじめて訪れたことを考えると、僅か五年のあいだに四回も戸山荘を訪問したのはよほど戸山荘が気に入っていたのであろう。

家斉の戸山荘訪問に関連する記録や随行記から当時の庭園景観を追跡してみよう。寛政五年(一七九三)三月二三日、家斉がはじめて戸山荘を訪れたときの記録は以下の三種ある。

1. 大田南畝の「尾州外山屋敷一見の事」

2. 三上季寛の「和田戸山御成記」

3. 佐野義行の「戸山の春」

まず大田南畝の「尾州外山屋敷一見の事」を通して戸山荘の眺望を考えてみよう。ただし、この記録は三月二三日の將軍の光臨に先立ち、戸山荘を見分した時の記録である。本文の内容は、主観を一切まじえず、庭の施設を道筋に沿って淡々と書き上げているものである。この文章には「見晴らし」という言葉が五回も出てくる。大田南畝は立ち止まって園内あるいは園外の景色を何度も眺め回したらしい。「見晴らし」の場所はそれぞれ「廬山寺」、「文殊堂」、「南西御茶屋」、「両円峰」、「両臨堂」と明記されている。眺望の地点と眺望景観を表にすると、以下ようになる。

場所	眺望した景観	原文
廬山寺	水辺	廬山寺見晴し水辺あり
文殊堂	水辺	前の水辺つづきの見晴し
南西御茶屋	柴原	此御茶屋右向の方柴原見晴し
両円峰	杣水辺	此峰の見晴し杣水辺なり
両臨堂	園内	両臨堂前見晴しにて暫く休み
餘慶堂	富士山	此上より不二見ゆる

「尾州外山屋敷一見の事」を参照して作成する

なお、餘慶堂の眺望に関しては「此正面より左りの方に松紅葉其外の植込刈込なり。此上より不二見ゆる」と記され、餘慶堂の正面から左の方に松や紅葉などの植込み、刈込みがあり、その上から富

士山が見えたという記録である。

つぎに、將軍來訪の当日の様子を記した随行記が二つある。旗本三上季寛の「和田戸山御成記」⁽³⁶⁾と佐野義行の「戸山の春」⁽³⁷⁾である。

三上の記録は戸山荘内の各景についてはほぼ余すことなく触れており、餘慶堂の眺望に関しても詳しく述べている。大樹をくまなく植えていくが、切り開かれた梢の間に遥かに五重の塔が見え、どこの伽藍かと思ったところ、これも庭の中に設けられたものと聞いて驚いた。同じような手法で左手の枝の梢を馬場の囲いのように平らに切り抜いてある。何のためかと思つて見たら、富士山の高嶺が白々と見えた、などの記述が展開していく。また、拾翠台と名付けられた建物からの眺望についての記述があり、そこから見渡せば、高田馬場や雑司が谷、鬼子母神などくまなく観賞できたという。

もう一つの佐野義行の「戸山の春」にも当日の状況が記録されている。義行は家禄三五〇〇石の旗本で、この「戸山の春」はかなり広く書き写されたらしい。⁽³⁸⁾

本立のうえから富士の高嶺の見晴らしはすばらしいと聞いたが、その日、曇りのせいで見えなかったので大変口惜しいとの記述がある。五重の塔が遙かに見えた。富士山の観賞ができるように、高い梢を切り払い、遠くまで見通せるように工夫が凝らされているとの記録があるところから、佐野義行にとって富士遠望は叶わなかったけれども、眺望を楽しむにしていたことがわかる。

二つの記録を読むと、富士遠望について矛盾が生じる。同じ日に三上季寛は、富士山を遠望できたと記録したのに対し、佐野義行の場合、曇りで見えなかったという。一時的に曇っていた可能性も考えられるが、いずれにしても、戸山荘の観賞においては富士遠望が大いに期待されていたらしく、また富士山の眺望が賞賛されていたであろう。富士山の遠望景観を好んで観賞し、そのために木の枝を切り払う手法も久世舎善の時代と変っていない。

将軍家斉はその後もしばしば戸山荘を訪れた。その都度随行記や園記が書かれ、餘慶堂の眺望景観に関しては多くの記述が残っている。まず寛政一〇年（一七九八）一〇月七日、将軍家斉が秋の戸山荘に再々度遊んだ時の随行記は成島衡山の記録がある⁽⁴⁰⁾。

成島衡山（勝雄）は幕府の儒官である。彼もまた、将軍のお供に加えられたことをたいへん喜んでいた。これまでの園遊会はいつも春ばかりであったが、この度は紅葉の戸山荘を訪れることができたという。

この記録の内容はそれ以前のものと同様だった違いは認められない。けれども林の梢が十間ばかり剪定されており、その合間から富士の高嶺にある雪が白々と見えた。この眺望構成の巧みさには言葉で表現できない感動を受けたという。具体的数字を挙げて林を剪定する規模が表わされているのは初めてである。言葉どおり「十間」、つまり一八メートル余りの剪定が確かだとすると、かなりの長さで規

模の工事だということがわかる。

林頭工剪成凹字、突出松間富士峰

庭師により凹字に剪定され、松の間から富士山の峰を突出させて眺望させるといふ詩の表現である。効果的な眺望を図る手法が細かく描写され、松という仲介を通して、遠くの富士を見るという人工的效果を強調させる手法が強調されている。

家斉時代の尾張藩九代藩主であった徳川宗睦（一七三三—一八〇〇）は詩作や園遊、茶会などを好んで催した文化人でもある。宗睦は、宝暦十一年（一七六一）に尾張藩主となり、以降約四〇年にわたり藩を治め、中興の祖と評された人物である。戸山荘もこの時代に再び盛期を迎えた。戸山荘は家斉をはじめて迎えた寛政五年（一七九三）より前、すでに高い名声を博したが、おそらく将軍を接待するため、天明期（一七八一—一八九）から寛政のはじめごろにかけてさらに整備が進められたのであろう。

宗睦は詩文に造詣が深く、自ら歌を作った記録が残っている⁽⁴¹⁾。戸山荘でも好んで詩文で景観を称揚した。尾張藩明倫堂の督学として藩学を興していた細井徳民に命じ、有名な戸山荘二十五景を選ばせ、詩を作らせたことで有名だが、二十五景の筆頭を飾るのは餘慶堂の景観であった。

飛花如雪散春筵。十里仙松翠欲煙。元侯富貴何須問。日酌千樽

會衆賢⁽⁴²⁾

(散りゆく花は雪のように春の宴の席に舞い落ち。

十里に及ぶ仙松は緑に霞もうとしている。

元侯(宗睦)の富貴を今さら尋ねる必要はないだろう。

一日に千樽を酌み交わし大勢の賢者と会っているのだから。)

ここには春の戸山荘での賑やかな宴会の様子が描出されている。

餘慶堂の周囲には「十里の仙松」という緑いっぱい環境がある。

細井徳民の作った「戸山荘二十五勝詩」は戸山荘の二五箇所を題として作った詩である。その中では、餘慶堂から修仙谷までの十三景を七言絶句で、臨遥亭から玉圓峯までの十二景を五言絶句で詠っている。実に韻の合った詩であり、詩の内容に潜む伝説を連想させ、各名勝の雰囲気醸し出させる。観客の心を掴むような見事な漢詩である。特に桃源郷の隠居風景が詩の至る所に読み取れ、文人の理想的景観が戸山荘の名勝に託され、表現されている。眺望について詠まれた部分は両臨堂、臨遥亭、拾翠臺、玉圓峯の四箇所にと及んでいる。(カッコ内に訳)

兩臨堂 眼界蒼池與茂林、兩臨堂上画蕭森、清遊盡日無塵事、
唯有松風入玉琴。

(兩臨堂 視界に入ってくるのは青い池と生い茂る林

兩臨堂でひっそりとした森のたたずまいが描かれる

終日風雅な遊びをして浮き世の雑事は無く

ただ松を吹き抜けた風が美しい琴の音を奏でるのみ)

臨遥亭 一望林亭上、迢々目不窮、分明辨物象、都在落暉中

(臨遥亭 林の中にあずまやから見渡せば、

(視界は)はるかに果てしなく広がる

自然の景色がはっきり見分けられ

すべては夕日の中である)

拾翠臺 日夕高臺上、晴煙滿野垌、千山唯一黛、咫尺染眉青

(拾翠臺 夕方高台に昇れば

うららかな春の霞が郊外に満ちている

連なる山々はただただ黛のように黒いが

すぐそこは眉が青に染まっているようだ)

玉圓峯 孤峯削翠玉、登眺出塵埃、水光兼樹影、都向境中開

(玉圓峯 孤峯は翠玉を削ったかのよう

登って眺めれば、俗世間を脱した思いである

水の光も樹木の影も

すべてが視界に展開している)



図7 餘慶堂前庭 戸山山荘圖藁(寛政10年 1798 谷文晁 国華1148号)

寛政一〇年(一七九八)九月には、徳川宗睦は著名な画家の谷文晁を戸山荘に招き、徳民の二十五景の詩をもとに絵を描かせた。その中に「餘慶堂前庭」という一幅があった(図7)。その翌月には、將軍家斉を再々度迎えることになった。戸山荘の最盛期といつてよいであろう。谷文晁の戸山荘絵図と細井徳民の詩を対照しながら、この時代の戸山荘の景観を確認してみよう。

現在谷文晁の図と同封して保存されている「戸山荘二十八図記」がある。そこには餘慶堂に関して次のような記述がある。「餘慶堂図 是為餘慶堂南面、堂本西面、西南雙岱之間、開林出富嶽、次而遠樹頂上轟然者、世外寺五層塔也、堂前石路岐、右入林間、則出茯苓坂⁽⁴³⁾」。この図は餘慶堂の南から見た景観で、堂は本来西に面しているという。富士山は戸山荘の西南方向に位置していることから、餘慶堂を建築する当初、遠望はすでに意識されていた可能性が高い。山の間に、林を開いて富士の眺望を得ている。次に遠い木立の頂上から轟き現れるのは、世外寺の五層塔である。堂の前に石鋪の道があり、右に行けば林間をたどって茯苓坂に出るという。

実際の図を見てみよう。図の右下に餘慶堂の屋根が描かれ、そこから見た前庭と眺望景観が描かれている。堂の前面は松類と楓の木で覆われ、楓は綺麗に紅葉している。石で鋪かれた小道に導かれ、右の林に入り込むと、茯苓坂に出られる。図面の左に白く小さく描

かれているのは富士山であり、墨で書かれた「富士」という字がある。図面の右に、尖った塔の上部が描かれ、「世外寺塔」と記されている。その付近の樹林は綺麗に伐られている。この文書には西南の二つの峰の間に、「開林出富嶽」（林を開いて富士の眺望を得ている）と記されているところから、松林に手を加え、富嶽が眺望できるように図ったことがはっきりわかる。餘慶堂の富士は江戸百富士の一つに数えられ、「林間の富士」と称されて、すでに名勝として一般に広く知られていた。他の眺望装置には拾翠臺、両臨堂、玉圓峯などがあげられている⁽⁴⁴⁾。

谷文晁（一七六三—一八四〇）は田安德川家の家臣であり、江戸時代を代表する画家の一人でもあった。宗睦が彼に戸山荘二十五景を描かせたのはその実力を高く評価していたからであろう。戸山荘の風景を描いた「戸山山莊圖藁」はみずみずしい速筆で描かれ、戸山荘を実見した際のスケッチをもとにしたものだと考えられる。翌年、文晁は全二十七図を清書二巻の巻物に仕立てて尾張家に納めたというが、残念ながらこの巻物は現存しない。

谷文晁の戸山莊図に関連する史料に『栗山文集』に収録された「戸山莊図跋」がある⁽⁴⁵⁾。この文献によると、文晁は餘慶堂において宗睦に拝謁し、ここを起点に庭園を廻ったようである。堂舎橋門、目にしたもの一つ一つを写し、多数の美景をスケッチしたという。それに基づき寛政一一年（一七九九）に「戸山莊圖」の計二十七枚が

出来上がった。そのときの底本は柴野栗山（一七三六—一八〇七）に借りられた。

栗山は江戸中期の儒学者、昌平黌の教官で、程朱学を振興した。尾藤二洲、古賀精里とともに寛政三博士の一人に数えられる人物である。栗山は寛政一一年（一七九九）の冬、積年の願いが叶い戸山荘を見学できた。あまりの広さに最初は戸惑ったが、文晁の画稿を思い出しながら庭園を廻ったという。栗山は文晁の画稿が極めて正確に描かれていることに驚嘆した。つまり、文晁の戸山莊図は一種の案内図として利用されたといえよう。それはリアルに戸山荘の景色を描いた真景図だといつてもよい。庭園の真景図は、江戸中後期から数多く各地で作られていた。戸山荘に関する庭園図には、宋紫岡（一七八一—一八五〇）をはじめ、谷文晁、狩野養川院惟信（一七五三—一八〇八）、長谷川雪堤（一八一九—一八八二）など、尾州家出入りの絵師によって繰り返し描かれていた。

一九世紀、戸山荘をモチーフとした庭園図と記録がいくつか現存する。その中には必ずしもいいほど餘慶堂からの眺望が記録されていた。図8は「戸山園図記」に描かれた眺望図である。「戸山園図記」は文化九年（一八二二）秋、儒官の杜温直が当時の藩主徳川斎朝の戸山荘を觀て、その景勝について記したものである。

この図は餘慶堂からの遠望景観が描かれている。内庭から遠く見たせば、大樹がくまなく植えられていたが、右側に切り開かれた

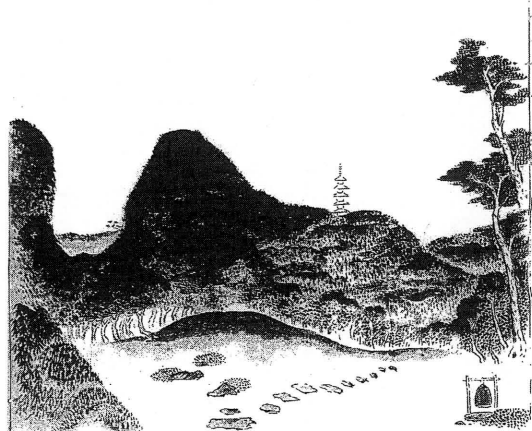


図8 戸山園図記 杜温直（文化9年 1812 国立国会図書館蔵）

遂出第門。至高堂。上餘慶堂。額華人之筆。制表
台。庭前數十步有鏡。綠色如苔。相傳海中之物也。
遠望紅楓。青松。摘梢似山峯之景。一道剪折木
木梢一里計。富嶽如在掌中。陰雲暗澹不可見。
所前過之五重塔。歷然在面。

長松鬱々碧林平。歲々摘木峯掃成。
塔景五重天外秀。空嗟富嶽更難晴。

經過二時又微。過門口歸。今日遺憾。為雨不見富嶽。

枝の間に遙か遠くの五重の塔が見えた。左側も同じ手法で枝の梢を平らに切り払ったが、その日雨のせいで、富士山が見えなかったという。図と一緒にになった「戸山園図記」はそのことを詳しく記述している。

「蔚蒼翠、劈開為凹形、嵌富嶽於其中者、餘慶堂之勝也⁽⁴⁶⁾」と図記の最初に噂で聞いた餘慶堂の眺望特徴を簡潔にまとめている。鬱蒼とした翠を開いて凹形にし、富士をその中に嵌め込む眺望は、餘慶堂の優れた景色である。つづいて実際に餘慶堂に至り、景色を觀賞した記録が続く。

一道剪折木、木梢一里計。富嶽如在掌中、陰雲暗澹不可見。⁽⁴⁷⁾

木を切り払うこと一里ばかり、富士はまるで手のひらにあるようだが、雨雲が暗く立ちこめて見ることができなかった。ここで眺望スケールの雄大さが強調されている。晴れた日の富士の峰はきつと掌にあるように見えたであろうというわけである。富士山の眺望はここで期待されたが、雨のせいで見えなかった。

この記録は明らかに前代の餘慶堂に関する文献を模倣し、既存の表現を使っている。先人の記述を借りた類似表現にすぎないとも考えられるが、戸山荘の維持管理は丁寧に行われており、かつての景觀にほとんど変化がなかったとみることも可能である。餘慶堂の富

士遠望は名高いだけに、よく維持されてきたのだと考えることもできよう。この文書中には望野亭からの眺望についての文章もある。

西北の曠野、高田馬場などを一望し、「眺望斯邊第一奇」(この辺の眺望は一番の絶景)だと述べている。⁽⁴⁸⁾

杜温直が「戸山園図記」を書いた三年後の文化一二年(一八一五)、御用人の宇野十郎右衛門が「尾州公戸山御庭記」を残している。この文書中にも餘慶堂に關しての記録がある。⁽⁴⁹⁾

餘慶堂 御縁先に半鐘有之候。横須賀海にて漁夫の引網に上り候につき、漁夫差上、此所に御あけ被遊候由申傳候。右餘慶堂の富士は江戸百富士之内にて、木の間の富士と申候由

宇野十郎右衛門は、文化一二年に「若様御付御用人」となり、それ以前に戸山荘の屋敷奉行をしていたかもしれない。ここで餘慶堂の富士は「江戸百富士」の一つ「木の間の富士」という表現が使われている。富士山の絶景を我が物にしようとするとき、やはり松の木に工夫をして実現している。餘慶堂からの遠望の特徴は松の木を除いては語れないであろう。江戸中後期に富士信仰が盛んになり、その風潮の中で新しい江戸名所の一つとして認められるようになった。当時の尾張藩は法を設置したため、高い身分の武家たちでさえ

も容易に訪れることができなかった戸山荘であるが、入る人にとっては、一種の名誉になり、多くの園遊記も綴られた。そこで庭園の神秘感も一層増し、名も高まったであろう。餘慶堂の遠望景観が江戸の名所にまで数えられるようになったのは時代の動きと人間の心理をうまくコントロールした結果ともいえるよう。

旧尾張藩士の平野知雄も明治時代に「尾侯戸山苑図」を残した。平野はかつて何十年もの間戸山荘の中に生活していたので、内部の人でしかわからない事情を詳細に記録し、詳しい絵に描き、貴重な文献を残した。図9で見られるように餘慶堂からの富士山の遠望は大規模な植物の剪定を通して獲得できるものであった。この作業によって平坦になった松の木を詳細に描き、遠方の富士山もはっきり描いている。本図はかつての戸山荘の景観を非常にリアルに表現していると考えられる。

江戸後期になると、御用絵師に命じて美景を屏風に描かせ、鑑賞することが盛んに行われた。またそれらの鑑賞を通して、一つの共通認識が培われたと考えられる。餘慶堂の眺望を描いた幾つかの絵図が残っている。図10は「戸山別荘眺望図」で、九代藩主宗睦の命により狩野養川院が描いたものである。養川院は度々尾張藩主の画用を勤めており、寛政五年の將軍家斉戸山荘御成りの時にも養川院が描いた福祿寿が用いられた。⁽⁵⁰⁾ 図11は「戸山庭園之図風炉先屏風」と題された長谷川雪堤による戸山屋敷庭園の図である。雪堤は文政、

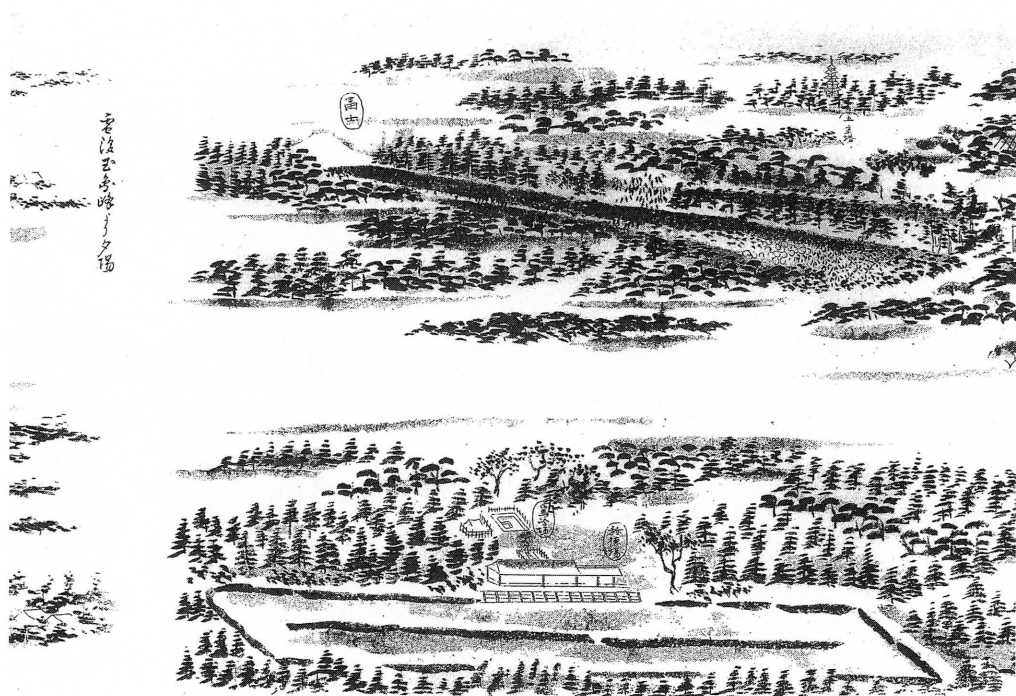


図9 「尾張藩戸山苑図」(平野知雄 国立国会図書館蔵)

天保年間に著名な「江戸名所図会」や「東京歳時記」を描いた長谷川雪旦の子で、父の没後をうけて「江戸名所図会」の挿絵を描いたほか画家としてもひろく知られている。尾張家の家臣で、天保年間に描いた「戸山庭園之図」二曲一双が徳川家に伝わる。富士山を遠景に戸山荘が俯瞰で描かれている。手前に見える建物は餘慶堂である。これら、江戸後期の絵図に描かれた戸山荘の景観を見ると、眺望景観に大きな関心が寄せられたことが想像できる。とくに園内から富士山を遠望する景観が好んで描かれたことは、これらの絵図から読み取ることができる。

戸山荘の造園が行われた時に絵画作品や名所と言われる景観がモチーフとされたが、ふたたび新しい名所を作り出すために、詩歌や絵画が動員されて戸山荘の眺望が更に宣伝されたのである。景観とそれを描写する芸術作品との連携の動きが戸山荘の景観構成の中に読み取れる。戸山荘の眺望手法は庭園に限らず、新しい詩歌や絵画作品を生み出すための「根源力」にもなった。

戸山荘の見聞記が数多く残されているが、これらの見聞記からも戸山荘の眺望景観の特徴を抽出することができる。(「国華」所収)。各見聞記の年月ははっきり記されていないが、基本的には餘慶堂からの眺望景観を評価し、描写する手法は変わっていないことが確認できる。絵図と合わせて考えると、餘慶堂から富士山を眺望する景観は少なくとも江戸中期以前から既に賞賛され、名を馳せるほどにな



図10 「戸山別荘眺望図」伝狩野養川院（19世紀 江戸東京博物館蔵）

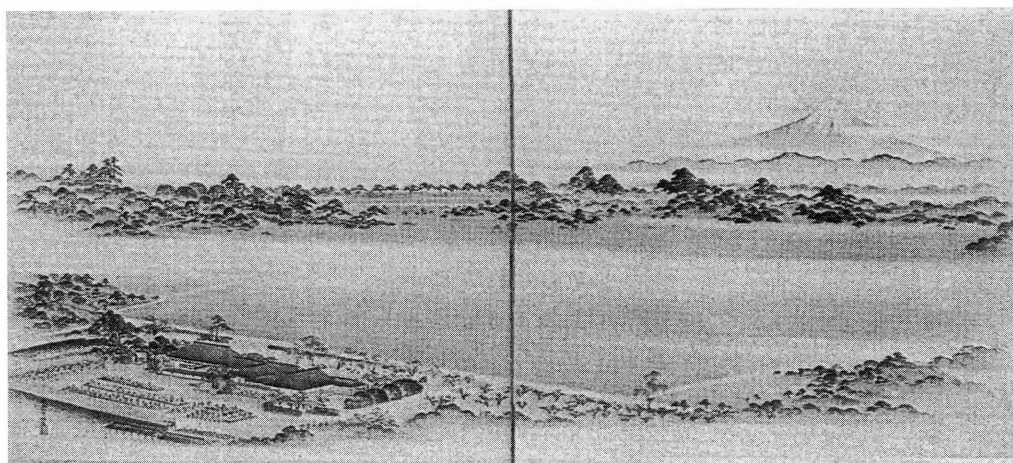


図11 「戸山庭園之図風炉先屏風」長谷川雪堤（19世紀 徳川美術館蔵）

っていたのである。富士絶景への眺望は江戸後期まで確実に維持されていたことが判明する。

まず一橋家の従臣中川勝世が書いた「戸山のもみぢ」(年未詳 一〇月)をとりあげてみよう。この「戸山のもみぢ」によれば、餘慶堂には明人文震孟の隷書で書かれた額がかかっていた。そこから左には古木の桜、石の大手水鉢があり、餘慶堂の前には松楓等が小高く茂り、紅葉は鮮やかで、それら松楓の梢を一段細く長く切り取り、まるで芝生の馬場のように剪定している。はるか向こうにたいへんよく晴れた富士山が見え、なんとすばらしい施設であ

ろうと賞賛している。「松たかき木すえに道を刈なしてみとりのすえに晴る富士の根」という和歌によく富士遠望の様子が描かれていると考える。

「戸山のみぢ」にはほかの眺望施設も記録されている。臨遥亭の前栽からは、遠く目白の不動の台、伝通院のほとりが望まれた。⁽⁵²⁾また玉圓峯の松の枝に登れば、品川の沖が見えるという。⁽⁵³⁾

次に「戸山御屋敷取建以来変革伝聞の記」をみてみよう。餘慶堂に関して、元は「富士見御殿」と称したという。つまり堂の名前が正式に「餘慶堂」となるまえに、「富士見御殿」と呼んだ時期があったということである。御殿の富士遠望の特徴に因んで呼ばれたのであろう。造設当初から眺望のことは深く考慮されていたのであろう。御座の間があり、この御座所から、庭中の木の梢を刈り込んで、その上から富士の峰があざやかに見渡せるという。また招隠里の五重の塔も見渡せる。「餘慶堂額面、御求にて、御次に掛らる、是より餘慶と唱替る」。⁽⁵⁴⁾つまり藩主のお求めに応じて御殿に「餘慶堂」という額を掛けることを機に、「餘慶堂」と称するようになったという。同記には臨遥亭、拾翠台、乾山の眺望景も記録されている。⁽⁵⁵⁾

臨遥亭は元禄二年（二六八九）に建てられたもので、臨遥亭の額は、二代藩主徳川光友（一六二五—一七〇〇）の御筆によるものである。この場所から東北を眺めると、目白台、牛天神、伝通院あたりまでも、見通すことができたという。拾翠台は望野亭より北方にあたり、

並木の松の下から、高田の馬場が眼下に見えた。富士の峰は西方に植わっている松の間から遙かかなたに見える。

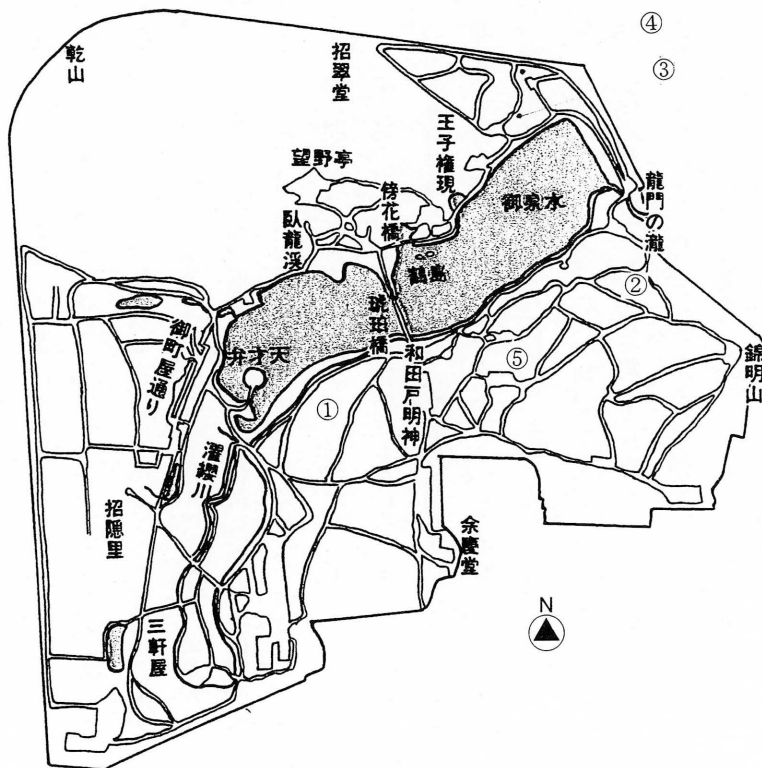
土居清健の「戸山枝折」（一八二四）にも眺望のことが書かれている。⁽⁵⁶⁾乾山からは秩父の山々、村の風景などを眺望でき、穏やかな雰囲気であつた。拾翠台からは高田馬場、雑司ヶ谷などが望まれ、雄大な景観であると賞賛されている。

5 戸山荘の眺望特徴

本稿では、御三家の筆頭である尾張藩の下屋敷—戸山荘の眺望景観を中心に考察した。まず一連の地図から戸山荘の地勢を考察した結果を述べたい。戸山荘は眺望に適した武蔵野台地に位置し、園内には当時の地域で最高峰の玉圓峯が築かれた。戸山荘は建設された当初から眺望の要素が備えられていたといえる。

さらに、手に入る史料を分析して得られた結果を言うと、戸山荘において、餘慶堂のほか、乾山、拾翠台、臨遥亭、玉圓峯、望野亭の五箇所からも園外の眺望ができる。図12には文献の記録による眺望地点の位置を示した。乾山からは「秩父の山々」、「村の風景」などが眺望でき、拾翠台からは「高田の馬場」や「雑司ヶ谷鬼子母神」などが見渡せた。また、臨遥亭からは「小石川台地」、「筑波山」、「民のかまと」などが観賞でき、また玉圓峯に登れば、「品川の沖」などが俯瞰できた。望野亭からは「西北の曠野」、「高田の馬

場」などを一望することもできた。さらに、廬山寺、文殊堂、南西御茶屋、両臨堂は園内の見晴らし台の役割を果たしたことから、眺望景観は造園時の大事なポイントにされていたことがわかる。戸山荘を遊覧する際、至る所に眺望施設が整えられていた。こうした諸



①玉圓峯 ②臨遙亭 ③廬山寺 ④文殊堂 ⑤南西の御茶屋
図12 戸山御屋敷絵図 (19世紀 徳川林政史研究所蔵平面図から作成)

史料の分析を踏まえ、図12は徳川林政史研究所蔵の「戸山御屋敷平面図」に眺望のできる箇所を記入し作成したものである。文献上の記録をもとにした眺望地点の位置を数字①、②で示している。

幕末に描かれた戸山邸風景復元図(山口祐一作画)(図13)は眺望のことを強く意識したものである。画面中央には広い池が描かれ、その周辺には茶屋、築山、塔などの景が点在している。庭園からは一望に山に囲まれ、画面の右上の部分に富士山が遠く描かれている。かなり開放的で、眺望景観に富んだ戸山荘像が描かれていることがわかる。この復元図で再現されたように、戸山荘は園外の山々などを庭園景観の重要な構成要素として取り入れていた。

そこで、戸山荘の中心的建物である餘慶堂に焦点を絞り、そこからの眺望景観を整理した。建物自体の特徴を考察した結果、建物は富士山が見える西南方向に開いており、当初から富士遠望を考慮に入れながら建てられたことがわかる。さらに、餘慶堂の部戸を開けることがいくつかの記録に強調され、建物から園内あるいは園外の空間を眺めることが強く意識されたことが想像できる。

戸山荘に関する絵図や随行記を通して、餘慶堂からの眺望景観を再現できる。縁側から庭の方向を眺めると、松や楓の木立が高く繁

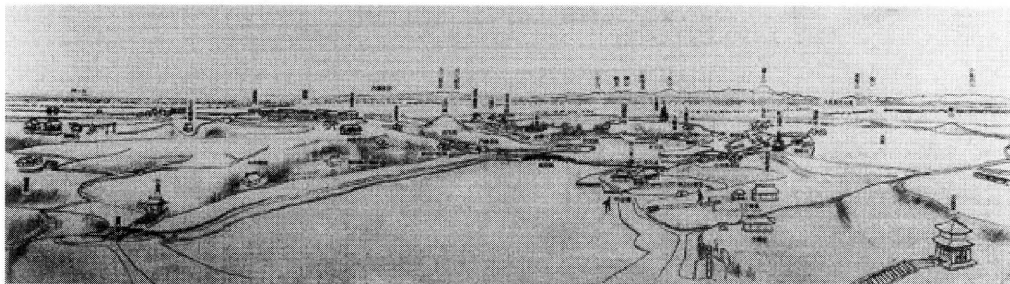


図13 戸山邸風景復元図（山口祐一作画 『將軍・殿様が撮った幕末明治』より）

っていた。松楓の一部は梢を平らに伐り縮めたところがあり、そこから富士山が見える。富士山を觀賞するため、ちょうどその部分だけ、樹の上を平らに刈り揃えることによって、いわば緑の額縁で富士山を絡めとった形にしている。

しかもその人為性を隠そうとはしていない。むしろそれがおもしろいと見られていたのである。戸山荘のこの眺望手法は、江戸の後期に至るまで一〇〇年以上も続いたことがわかる。おそらくこの手法は「借景」と呼んでもよいものであろう。

ここで、「借景」の概念について触れる必要がある。私はかつて「借景」は「庭園外の景観を、たんなる背景ではなく、その庭園の重要な構成要素として利用する行為、また手法を指す」と考え、そ

の構成要素は主に①借景対象、②見切り（中景）③園内景の三つがあげられるとした。手法としては主に園内景に「額縁」効果を持たせ、対象物を顕彰させることである。借景の定義のなかには「庭園内の景を自己破滅するまで園外景を立てる」という極端なものもあったが、江戸にある大規模な大名庭園では、一つの景ですべての庭景をまとめたり代表させたりするのは無理である。

戸山荘の場合、借景の対象に富士山があり、見切り（中景）は松の木で作られた額縁であると考えられる。松の枝を切り払う眺望行為は意識的に富士山の景を觀賞するためである。切った松の形は扇子のように富士山を載せている、これもまた額縁効果の演出である。松の枝を切り取って眺望する行為は、園内景に「額縁」効果を持たせ、園外の対象物―富士山を顕彰させる「借景」の行為であるといえよう。

6 戸山荘における眺望景観の成因

江戸時代の名園評価の基準を考える場合、洗練された禅僧の庭園と対照的に、庭園の「豊かさ」が追求されるのが重要なポイントである。江戸後期に兼六園を名づけるときに、根拠となった六勝の評価基準はまさに庭園の豊かさを強調していた。⁵⁹ 内部景観として、東海道沿いの宿場町や琵琶湖など日本国内の名勝を再現する手法、または中国景観の西湖や廬山などの景勝地のイメージを想像して表現

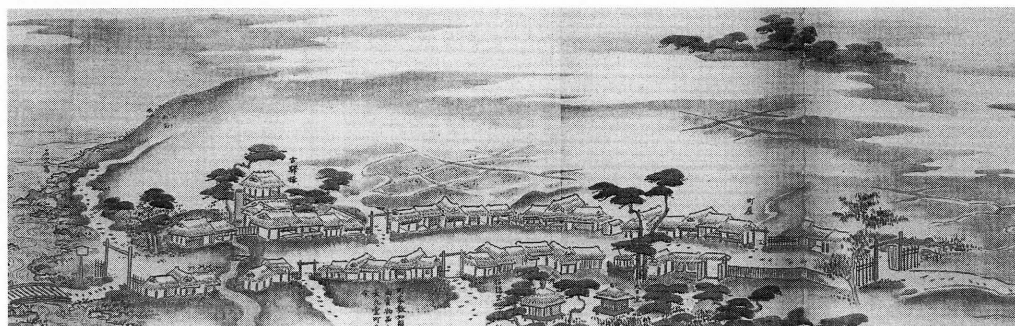


図14 戸山御庭之図（文政9年 成島和鼎 徳川美術館蔵）

することによって、広い敷地にできるだけ多数の景観要素が含まれるように工夫した。この「豊かさ」の表現は庭園内部の景観にとどまらず、外部景観をいかに吸収し、内部景観との調和を図るのかも大事な一環となった。

この意味において、戸山荘の造形は内外景観を調和させる実践であった。内部では、武士への禁制で実現できなかった農業体験や庶民生活や、町屋の虚構空間、各地の名勝を集中して豊かに表現した。外部景観の観賞に関しては、富士山への遠望が特筆すべき事柄である。簡単に辿りつくことのできない、人間の工夫の届かない遠い存在の富士山まで、松の木の剪定を通して園内に取り込み、思うとおり

に景観を設計した。

形式が異なるにせよ、庭園での眺望行為はすでに江戸以前から発生していたことは従来の研究が指摘したとおりである。江戸時代になってから、より眺望行為が盛んになる現象が目立ってきた。その原因は時代の閉鎖的状态にあり、外界への強い志向が働くと、「借景」手法が活用されるとの指摘がある。⁽⁶⁰⁾ 造園活動の性格が、庭園に対して造園の形式のみならず社会性をも付与したことがわかる。江戸時代の庭園に眺望行為が一層流行した理由は以下の社会情勢や文化的要因から理解すべきだと考えられる。

① 遊園的機能

庭園はいつも所有者の性格を表している。貴族の庭園のみやびな雰囲気と反対に、大名の庭園は武士の豪快な気風を反映している。七代藩主徳川宗春と一一代將軍徳川家斉の豪快な性格は戸山荘に与えた影響が大きかった。戸山荘自身のもつ遊園的機能もあげられよう。それを証明できるのは名高い御町屋の入口に立てられた高札である。⁽⁶¹⁾ 内容はまったく時代の法律に逆らい、ルールを否定し、身分の逆転など武家秩序の否定も見られる。御町屋の騒ぎなどで裏付けられるように、武士の奇抜な気風により遊戯性に富んだ設備が戸山荘に設置された（図14）。町は、その特徴として人々の変身を許すものを備えていたともいえる。そこにはある種の無秩序と自由が

あった。現実にあつてはならない理想の桃源郷の表現でもある。自分も楽しみ客も楽しませることができたとすれば庭園が芸術作品にまで高められなくても造園としては十分ではないかという見方もある。⁽⁶²⁾ 戸山荘の借景も伝統的見え隠れの構造から離れ、芸術作品としての質が衰える恐れがあるにもかかわらず、庭園を楽しむのに十分な価値があると理解しても差支えがないであろう。

② 饗宴的性格

庭園の眺望の大きな擁護者として、武家の棟梁である將軍の庭園観も直接に作用した。江戸時代の歴代將軍の園芸趣味に伴って、大名達は競って屋敷内に立派な庭園を造った。もちろんこういった庭園は大名自身が觀賞し、楽しんでいた面もあるが、最も大きな機能としては、將軍家の御成や、他の大名家との儀礼と交際のためであった。庭園觀賞の仕方もこういった機能により変わってくる。庭園は、大名の身分を維持するうえで必要なものであると指摘された⁽⁶³⁾ あり、長らく続く太平の世にあつて社交こそが重要な政治の場になった。庭園での交流は同時に文化的活動や將軍へのもてなしの重要な手段にもなった。大名庭園が持つ饗宴的性格が庭園の共通的趣向を形成する重要な一因にもなる。借景が盛んに表現する力が政治の場に潜んでいたであろう。

③ 漢文表現の影響

寛永一〇年（一六三三）に増上寺十境が成立した。考証学者の竹尾善築（二七八二—一八三九）の著書の『縁山志』⁽⁶⁴⁾には当時の風景観についての記述があつた。景色には遠近がある。遠いところには山川風雲などがある。全部庭園の外にある景観であるが、庭園内部に吸収すべきである。近いところには層樓傑閣や、池、樹木がある。全部園内に備えて、庭園の美観になる。この二者を兼備する庭園は稀であろう。

このように漢文の世界では、園内の景観を表現するだけではなく、園外景観と調和してはじめて、名園として認められる傾向がある。江戸中後期から庭園の眺望が盛んになると先行研究は指摘しているが、すでに江戸初期から、当時の知識人たちが漢文でたくさん園記と詩歌を作っていた。庭景を称えると同時に、周囲の環境と眺望の有無に大きく関心を払ったことに特に注意すべきであろう。眺望を得るために、木の枝を伐り落すような大きな行動をとるのは漢文の世界では昔から表現されてきた。中国でも似たような造園方法がみられる。『白氏文集』（九世紀）の「截樹」（樹を截る）という詩には、木の枝を截つて青山を眺めることができた喜びが描写された。また明の造園書『園冶』⁽⁶⁵⁾にも樹の枝の邪魔な部分を切れば遠望も利くという記述がある。ここで、漢文が庭園での理想世界の実現に具体的な方法を提供したことは否定できないと考えられる。

南郭先生文集、鳳岡林先生全集、鷲峯全集、羅山先生文集、鳩巢先生文集、梅洞林先生集など江戸前期の代表的な漢文集に、庭園に関する記録が多く記述されている。漢文で表現された庭園景觀に眺望に関する記述が特に好んで取り入れられる傾向がみられる。当時の知識人の基礎教養とされる漢文は広く読まれることにより、園遊記や随行記の中によく眺望の表現として用いられた。賞賛の意味を込めて書かれた文章が、一歩先に時代の風潮と評価の基準をリードしていることがあるのに注意しなければならない。漢文の中で表現される雄大な風景観と武士の庭園感覚とがうまくマッチしたことも重要である。江戸時代名園の評価として、借景の有無が大きな決め手になると私が考えるのもこういった雄大な庭園感覚と大きくかわっている。

「双六の絵図で出来たる御庭」とされた戸山荘は、庭園内外の景觀を調和させる工夫に成功した。「豊かさ」を追求する江戸時代の名園評価の基準を理解するため、戸山荘庭園は重要な例になると考えられる。

表1 戸山荘関連史料一覧表

番号	戸山荘関連史料	作成年代	作者
1	和田戸山庭築造	寛文十一年 (1671)	
2	戸山御庭記	享保二十年 (1735)	久世舎善 (大田南畝写)
3	戸山御屋敷御取建以来伝聞之記 (別名『戸山御屋敷記実全』)	寛延二年 (1749)	御屋敷奉行水谷友之右衛門
4	御庭道記	宝暦五年 (1755)	戸山御屋敷奉行福田助左衛門
5	戸山御屋敷御取建以来伝聞之記	不明	不明
6	戸山御成の記	寛政三年 (1791)	成島峯雄
7	尾州外山屋敷一見の事	寛政五年 (1793)	大田南畝
8	和田戸山御成記	寛政五年 (1793)	三上因播守季寛
9	戸山の春 (『戸山御庭道の記』)	寛政五年 (1793)	佐野肥前守義行
10	戸山集	寛政五年三月 (1793)	不明
11	尾侯戸山荘記	寛政九年 (1797)	牧野伊予守成著
12	とやまの紅葉	寛政十年 (1798)	成島勝雄
13	戸山荘園記	寛政十年七月 (1798)	谷文晁
14	戸山荘園巻跋	寛政十二年 (1800)	朝請侍間儒員柴野邦彦
15	同興頼千秋尺牘二篇	不明	朝請侍間儒員柴野邦彦
16	戸山御庭の記	享和元年 (1801)	不明
17	戸山御庭之記	享和二年 (1802)	不明
18	戸山園記	文化九年 (1812) 十月	杜温直
19	尾州公戸山御庭記	文化十二年 (1815)	宇野十郎右衛門
20	戸山御庭記	文政四年 (1821) 以後	不明
21	戸山枝折	文政七年 (1824)	土居清健
22	戸山御庭拝見之節道順書	文政十三年 (1830)	不明
23	文政十三年戸山御庭見物被仰付候 時御飾付書	不明	不明
24	『戸山御山荘の記』	天保十四年 (1843)	牧野成
25	鼠山練兵掃途経戸山山荘記	弘化四年五月 (1847)	遠江守加藤泰從
26	戸山御邸見聞記三卷	明治元年 (1868)	平野知雄
27	戸山御屋敷取建以来変革の記	不明	不明
28	戸山御屋敷御庭記 (『戸山御邸 御庭之記』)	安政三年 (1856)	不明
29	江戸外山御別荘之記	不明	不明
30	外山並後楽園両苑之記<写>	不明	久世舎善、坂昌成著
31	戸山御庭記	不明	冢田謙堂
32	戸山御庭御見物之記	不明	不明
33	戸山御屋敷御付帳	不明	不明
34	戸山御殿ヨリ引統侯御内密金一卷	不明	不明
35	戸山取替金一卷	不明	不明
36	戸山二十五景特<写>	不明	細井徳民
37	外山庭之記 (『外山庭の記』)	不明	不明
38	戸山庭拝見記	不明	不明
39	戸山の記	不明	青山播磨守
40	戸山のもみぢ	年不明十月	中川勝世
41	戸山御庭堂社並所所名	不明	不明

この表は、以下の文献を参考に作成した。東京市史稿遊園篇第一。同第二。同第三。名古屋市蓬左文庫所蔵史料。国立国会図書館所蔵戸山荘史料。国華に掲載する「園苑源流考」。日本随筆大成。徳川実紀。徳川林政史研究所蔵史料。都立中央図書館所蔵史料。

表2 戸山荘図と写真資料一覧

番号	図名	年代	画家	所在
1	宝暦頃戸山御屋敷絵図	宝暦頃	不明	東京市史稿に複製あり
2	戸山荘図	宝暦年間	不明	国会図書館
3	戸山集画本	寛政五年	不明	国会図書館
4	戸山別荘絵巻	寛政七年	藤秀月	岩瀬文庫
5	戸山庭園之図付寛政九年 尾張大納言臨邸之記	寛政九年	不明	国会図書館
6	戸山荘最勝景十図	寛政十年	谷文晁	国会図書館
7	戸山山荘圖葉	寛政十年	谷文晁	国華
8	戸山尾州邸園池全図	寛政	不明	国会図書館
9	途山御庭地取図（巻物）	寛政年間	狩野惟完	国華
10	外山御庭之図付外山御 庭之記二巻	享和年間	不明	国会図書館
11	戸山園図記	文化九年	杜温直	国会図書館
12	戸山表御殿図	文政三年	不明	蓬左文庫
13	戸山尾張府公園池全図	文政期	不明	国会図書館
14	戸山御殿図	天保十四年	不明	東京国立博物館
15	戸山御庭絵図	江戸末	不明	蓬左文庫
16	尾陽公和田戸山御仮山図	江戸末	不明	蓬左文庫
17	戸山御屋敷西北外圍之図	不明	不明	蓬左文庫
18	戸山斎齋及焼後図	明治元年	平野知雄	国会図書館
19	戸山苑図（尾侯）一巻	明治元年	平野家本臨模	国会図書館
20	戸山荘景色図	不明	狩野惟完	徳川美術館
21	戸山荘絵巻	不明	不明	穴八幡宮
22	戸山御庭記一冊	不明	不明	国会図書館
23	戸山夏景の記	不明	田口成詞並書・華 島宣昌画	国会図書館
24	戸山地取図	不明	狩野晴川	東京国立博物館
25	戸山御屋敷御住居向御取 建図	不明	不明	蓬左文庫
26	戸山御屋敷之図	不明	不明	蓬左文庫
27	戸山御屋敷取之図	不明	不明	蓬左文庫
28	戸山御屋敷境界屋敷之図	不明	不明	蓬左文庫
29	戸山邸内町屋（大日堂付近 より古駅楼を望む）	幕末	徳川慶勝	徳川林政史研究所
30	養老泉・茶屋	幕末	徳川慶勝	徳川林政史研究所
31	琥珀橋・四つ堂・傍花橋・ 茶屋	幕末	徳川慶勝	徳川林政史研究所

注

- (1) 岡田甫校訂『俳風 柳多留全集』新装版二 三省堂、一九九九年、二〇四頁
- (2) 岡田甫校訂『俳風 柳多留全集』新装版四 三省堂、一九九九年、五一頁
- (3) 同2、八二頁
- (4) 泡坂妻夫「尾張藩戸山荘は怪しい庭園」『歴史と旅』二〇〇一年三月号(第二十八卷第三号)、四四頁
- (5) 水谷友之右衛門「戸山御屋敷御取建以来伝聞之記」、名古屋市蓬左文庫蔵、一七四九年
- (6) 小澤圭次郎「明治庭園記」『明治園芸史』第十篇、日本園藝研究會、一九一八年
- 岡畏三郎「戸山荘に就いて」『造園雜誌』七一、一九三九年
- 『庭研』一二二号「戸山荘研究特集号、昭和五七年一一・一二月合併号、一九八二年
- 針ヶ谷鐘吉「戸山荘の面影」『庭園襍記』、一九三八年
- 小寺武久「尾張藩江戸下屋敷の謎―虚構の町をもつ大名庭園」中公新書、一九八九年
- (7) 児玉幸多監修『復元・江戸情報地図』朝日新聞社、一九九四年
- (8) 清水靖夫解題『明治・大正・昭和東京一万分一地形図集成』柏書房、一九八三年
- (9) 田中正大「東京の公園と原地形」けやき出版、二〇〇五年、一九頁
- (10) 正井泰夫「江戸・東京の地図と景観」付図(大江戸地理空間

図)古今書院、二〇〇〇年

(11) 同10)

(12) 三上季寛「和田戸山御成記」寛政五年三月(一七九三)、『東京市史稿 遊園篇第二』東京市役所、一九二九年、五一九頁

達摩堂を過ぎ給ひて、玉圓峯に登り給わぬ。さいの状に片くりて、高きことハ凡五丈斗もあんなるに、うちのぼらせ給ふ。むかしハ見渡されしかたもあらんに。今ハ老樹雲をしのく計なれハ、近きあたりハ見へさりけり。晴やかならん折からには、遠境のけしきをそと思ひやられ侍りぬ。

(13) 遠江守加藤泰從撰「鼠山練兵帰途経戸山山荘記」一八四七年、『国華』五八六頁

玉圓峰とて邸中第一の高山あり、道険しく岩間傳ひに登りゆくに、今朝より道に労れたるうへなれば、息あへき、足いたみて、やうやう登りたれば、頂には氈を敷き、御座の設あり、かたはらなる芝生にて、額の汗押ぬくひなとし、うち休みて見下ろせば園のうち、くまなく見えわたりにて、そのけしきいはん方なく、絵にもうつしかたかるへし、此所は都下にて、愛宕、湯島の台より地勢高しと聞く、さもあらんか、左の方へ行けば、上の御庭めぐらせ給ふに行あひ奉り、道の傍に躊躇したるに、名所名所を、見残さぬやうにすへしなと、おん仰有て、玉圓峰へ上らせ給ふ、やかてゆくほとに、広やかなる御亭の前に出たり、是は餘慶堂とて、

(14) 戸山邸内の長屋で生れた尾張藩士の平野知雄が明治初期に書かれた戸山荘を偲ぶ文章の中に「戸山の大絵図、諸留冊恩田藤蔵と云人、元禄一四年(一七〇一)に初てでき、御取建以来、四十年間、

留記無之、今度古老の者に問糺し、諸留記拵へ候との趣、藤蔵序文有之候、是も焼失いたし候よし、残念なる事ともなり。」と記録し、庭園成立当初の記録がきわめて少ないことが指摘された。

- (15) 「園苑源流考」に関して後の史料にまた触れるが、明治二二年(一八八九)一〇月創刊された美術雑誌『国華』の五号(一八九〇年二月)から一八一号(一九〇五年六月)にわたり、庭園史家の小澤圭次郎の「園苑源流考」が一四二回連載された。戸山荘に関しては五回にわたり紹介された。

- (16) 撰人姓名闕 一八〇二年、小澤圭次郎「園苑源流考」一五四回、『国華』一五三号、明治三六年二月(一九〇三)、一八〇頁

- 同「園苑源流考」一五五回、『国華』一五六号、明治三六年五月(一九〇三)、二四一頁

- (17) 吉河功「戸山莊庭園の特色と景勝」、『庭研』二二三号戸山莊研究特集号、昭和五七年一一・一二月合併号、一九八二年

- (18) 磯谷正卿「豊山二十五景」、名古屋市蓬左文庫蔵

- (19) 鈴木由次郎「易经(上)」(『全釈漢文大系』第九卷) 全釈漢文大系刊行会、一九七四年、一〇九頁

- (20) 水谷友之右衛門「戸山御屋敷御取建以来伝聞之記」、名古屋市蓬左文庫蔵、一七四九年

(前略) 餘慶堂に至る。ここは数数の間ありて、都あけわたし、いとつきつきしく設けられ、上段の間廣うして、御まし所と思ひまうけられたるさまめてたし、かたへの棚に、料紙、硯箱、まき絵なと、心ことなるを置き、豊なと高麗の縁にて、きらきらしく、向ひを見やれば、松楓の木立高く茂り、木の下やみのけしき興ありて、

土もさけなん夏の日の、たえぬ暑さも忘れつへう思はる。

- (21) 三上季寛「和田戸山御成記」、一七九三年、『東京市史稿 遊園篇第二』東京市役所、一九二九年、五二二頁

此殿ハ大屋造にして、あけ都御簾かけの具なとまふけさせ給ひて、雲の上の御よそふひをそまふけさせ給ふ。(後略)

- (22) 久世舎善(大田南畝写)「戸山御庭記」、一七三五年、『東京市史稿 遊園篇第二』東京市役所、一九二九年、一九頁

- (23) 福田助左衛門「戸山御庭之記(全)」名古屋市蓬左文庫蔵、一七五五年

- (24) 同 22

- (25) 同 22

- (26) 同 22

- (27) 上野洋三「石川丈山・元政」(『江戸詩人選集 第一巻』) 岩波書店、一九九一年、三頁

仙客来遊雲外巔 仙客来り遊ぶ雲外の巔

神龍栖老洞中淵 神龍栖み老す洞中の淵

雪如紉素煙如柄 雪は紉素の如く煙は柄の如し

白扇倒懸東海天 白扇倒に懸る東海の天

- (28) 林羅山「佐久間親衛校尉別墅十景」(『羅山先生詩集』) 一六三三年、『東京市史稿 遊園篇第一』東京市役所、一九二九年、二〇二頁

士峯夏雪 白雲高深士嶺頭。春過夏到不漸流。上天銀扇跳顛倒。一柄風涼十五州

- (29) 林鳳岡「観物園記」(『鳳岡先生全集』) 一六三九年、『東京市史

稿 遊園篇第一』東京市役所、一九二九年、二六一頁

作三重閣、而名曰聚遠。(中略) 土峯迢嶢、銀扇倒懸、四時宿雪、

千秋含光

(30) 同22)

(31) 同22) 一一頁

先に臨遥亭と額うちたる御茶屋あり。御数寄屋作りなり。御額は
亜相公御筆のよし。穴八幡目白の台小石川邊眼前にみへ、遙に筑波
山などもみゆる。遠望まことに臨遥亭なり。民のかまとも賑ひにけ
るとの御製も思ひ出ければ、

目も遙に民のかまとの長閑さを煙にしるき庭の数々とあだ口の出を
任せにいひもてゆけハ、龍門の瀧へ出る。

(32) 黒板勝美『続徳川実紀 第二篇』国史大系編修会、一九六六年、

二九四頁

(33) 同32)

(34) 栗山柴邦彦『戸山荘図跋』『栗山文集』巻之六、一八〇〇年、

二二頁

(35) 大田南畝写『尾州外山屋敷一見の事』一七九三年、『半日閑話』

日本隨筆大成八、九九頁

(36) 同21)

(37) 佐野肥前守義行『戸山の春』一七九三年、『東京市史稿 遊園

篇第二』東京市役所、一九二九年、五四三頁

(38) 同21)、五三〇頁

右の方の向ふに拾翠台とて小高き所あり。(中略) 見渡されたる方
ハ、名さへ高田の馬場隈なく見へて、そうしかや鬼子母神など云あ

たりまちかく手もときぬへきやハと覚ゆるもおかし。

(39) 同37)

餘慶堂にいたる。(中略) 木立のうへより、富士の高嶺見ゆるよ
し、今日は曇りて見えぬ口惜し、五重の塔の空輪はるかに見ゆ、此
富士望まれんりやうに、高き梢ともを伐拂ひたるか、見わたし遠く
続き、やや落葉して梢に路を成し、歩みも登りつつ、限りなく見
やらるる前に、海底より出まうてきたる鏡かけたり

(40) 成島勝雄『とやまの紅葉』『東京府文献叢書』、一七九八年、
『東京市史稿 遊園篇第二』東京市役所、一九二九年、六二二頁

奥のかたに、文震孟といへるかかきたる餘慶堂の勝かけあり、
むかひのかたにハはるかに五層の塔見えたり。又林の梢遠く立つら
なりたる中を十間はかりかほと剪、その間よりふしの高根の雪しろ
くさし出たるをみるやうにかまへられし心たくみ、いはんかななし。
庭のかたはらに海より出てたりとか、いと古き鐘をはつきにかけて
あり、

餘慶堂前出海鐘、名園風景属初冬、林頭工剪成凹字、突出松間富
士峰

(41) 福井久蔵『諸大名の學術と文芸の研究 下』原書房、一九七六
年、四五四頁

(42) 細井徳民『戸山荘二十五勝詩』、小澤圭次郎『園苑源流考』一
三三回、『国華』一五八号、明治三十六年七月(一九〇三)、三四頁

(43) 谷文晁『戸山荘二十八図記』一七九八年、小澤圭次郎『園苑源
流考』一三三回『国華』一五八号、明治三十六年七月(一九〇三)、
三五頁

(44) 同43)

拾翠臺図 拾翠臺、臺北面、西望山召嶠者富嶽也、臺下坂道右轉、則出古道岐左方

兩臨堂図 兩臨堂、南北兩臨、西面望右方、高不尖大石山、山里小菴傍、二層塔在屋東西角、堂前北下、則宇津谷

玉圓峯図 玉圓峯、湖南岸西行、四五百步、横絶石壇琥珀間則峯下也、陟陰而降陽、南行田間三百餘步、達称徳場

(45) 同34) 栗山柴邦彦「戸山莊図跋」『栗山文集』、卷之六、一八〇〇年、二二頁

(46) 杜温直等「戸山園図記」一八一二年、『東京市史稿 遊園篇第三』東京市役所、一九二九年、一頁

(47) 同46)、『東京市史稿 遊園篇第三』東京市役所、一九二九年、七頁

遂出茅門、至高堂、上餘慶堂。額華人之筆。製古。庭前數十步有鐘。綠色如苔。相傳海中之物也。遠望紅楓青松、摘梢似山峯之景。

一道剪折木、木梢一里計。富嶽如在掌中。陰雲暗澹不可見。所前過之五重塔、歷然在面。

長松鬱鬱碧林平。歲々摘来峯樣成。塔景五重天外秀。突嗟富嶽更難晴。

經過二時又微、過門口帰。今日遺憾、為雨不見富嶽

(48) 同46)、四頁

額望野之字。蓋源齋公之書也。西北一般曠野、長堤纏之。無雜樹。堤松如足菊、原松如拋。侵雨上堤、望高田馬埒。比廣野於江北鼠山漸廣、以江西駒野不及。拭足至亭、開行厨、冷飯果腹、温酒醫胃。

大聲高談、四鄰無人。此際之奇遊乎。野右有高塔知有寺。雨不至、可惜。

眺望斯邊第一奇。蟠松萬種伏龍姿。郊原渺々傍隣絶。漫發高聲人不

知。

(49) 宇野十郎右衛門「尾州公戸山御庭記」『純堂叢稿』一八一五年、『東京市史稿 遊園篇第二』東京市役所、一九二九年、五〇七頁

(50) 同21)

(51) 中川勝世「戸山のもみぢ」(年末詳 一〇月)、『国華』、五七二頁

午刻ころ、御庭の奉行小川重平次あない御座敷向拝見、御間つき餘慶堂にいたる。餘慶堂(木地縁朱丸板額、隸書紺青明人文震孟筆なり)左に古木の桜、石の大手水鉢、前には松楓等こたかく、紅葉いとよく染たり、松楓の一段梢を細う長く伐なし、さなから芝生の馬場にひとしく、むかひに富士いとよく晴れたり、これをなん望まれんの御設なるよし。

松たかき木すえに道を刈なしてみとりのすえに晴る富士の根

(52) 同51)、五八三頁

臨遙亭にいたり、御くたもの、御茶など、人々にたまはる、前の小垣に、郁子の蔓はひまつはれり、放れて石の大手水鉢あり、前栽より、目白の不動の台、伝通院のほとりを望む。

夕日さす目しろの台のむら紅葉みきに見ゆるはわか家なるらん

(53) 同51)

玉圓峰にのほる、いと高山にして、人々も息やすめてなんいひしろひ、上にいたれば、氈敷腰かけの台とすえらる、又御湯なとたま

はる、此松の枝にのほれは、品川の沖見ゆるとなん、横さまに下るに、大いにやすく、紫竹門に入る、これより餘慶堂の御内庭といふ。

(54) 「戸山御屋敷取建以来変革伝聞の記」『国華』、五九〇頁

元は富士見御殿といふ、御座の間なり、此御座所より、御庭内諸木の梢を蒞詰たる上に、富士峰明かに見へ渡る、又招隠里の五重の塔も、明らかに見ゆる、年頃、餘慶堂額面、御求にて、御次に掛らる、是より餘慶と唱替る。

(55) 同54、六二六頁

臨遥亭 元禄二年御取建被遊候、臨遥亭の額は、瑞龍院様御筆、此所遥に東北を望めは、目白台、牛天神、伝通院邊までも、見えわたる。

拾翠台 望野亭より子の方に當り、並木松の下なり、高田の馬場、眼下に見ゆ、富士峰は西の松間に遙なり、此邊松多く、実に翠を拾ふ台なり、假床に毛氈を敷き、遠眼鏡など御飾に相成る。

乾山 戌亥に當る山ゆえ、乾山と号す、總御屋敷の乾なり、此処より富士峰は西に方り、諏訪谷台、戸塚、大久保の村村見へ、北には高田馬場、砂利場の邊、明かに見ゆ。

(56) 土居清健「戸山枝折」一八二四年、『東京市史稿 遊園篇第三』東京市役所、一九二九年、四四七頁

乾山とてなみたてる古松、野風に吹まはまつれて、屈曲おのつあら見所多し。いたたきにいたれば、遠くハ秩父の山々、近くハ嵐山、戸塚原、源兵衛村、諏訪の森、山吹の里などまで見えて、煙村の風景いと幽なり。

小高き芝山を拾翠臺とて、高田馬場雜司谷にいたるまで、常盤木の

みどり居ながらひろひまし。

(57) 李偉「初期小石川後樂園における眺望行為に関する研究」日本造園学会誌『ランドスケープ』VOL.68 NO.5 二〇〇五年

(58) 上原敬二『日本式庭園』加島書店、一九六二年、一〇九頁

(59) 六勝とは、「宏大（こうだい）」「幽邃（ゆうすい）」「人力（じんりょく）」「蒼古（そうこ）」「水泉（すいせん）」「眺望（ちようぼう）」のこと。宋の時代の書物『洛陽名園記（らくようめいえんき）』に現われた言葉で、兼六園は、この六勝を兼ね備えているという理由から、文政五年（一八二二）、奥州白河藩主・松平定信によつてその名を与えられた。

(60) 進士五十八『日本庭園の特質 様式・空間・景觀』東京農業大学出版会、一九八七年

(61) 牧野成著「尾侯戸山荘記」一七九七年、小澤圭次郎「園苑源流考」一三〇回、『国華』一四八号、明治三五年九月（一九〇二）、七八頁（カッコの中は小寺氏訳）

一、於此町中喧嘩口論無之時、番人は無論、町人早々不出合、双方不分、奉行所江不可届事（この町中において喧嘩口論これなきとき、番人はもちろん、町人早々に出合わず、双方を分けず、奉行所へ届くべからざること）

一、此町中押買不及了簡事（この町中に押し買いは了簡におよばざること）

一、竹木之枝幾利支丹堅停止之事（竹木の枝、キシタンかたく停止のこと）

一、落花狼藉いかにも苦敷事（落花狼藉、いかにも苦しきこと）

一、人馬之滯有ても那くても構なき事（人馬の滯り、あつてもなくとも構なきこと）

年月日

奉行

(62) 西沢文隆『西沢文隆小論集三 庭園論』相模書房、一九七六年

(63) 白幡洋三郎『大名庭園 江戸の饗宴』講談社、一九九七年

(64) 竹尾善榮「三縁山志」文政二年（八一九）、『東京市史稿 遊園篇第一』東京市役所、一九二九年、三八頁

蓋景有遠近。遠則山川風雲、蘭棠徠徂、皆在其外、浮於内。近則層樓傑閣、池水林木、罄備於内、而成觀美。此二者、偶有一闕一、両全者鮮矣。

(65) 上原敬二『解説 山水並に野形図・作庭記』加島書店、一九八二年

多年樹木、礙筑蒼垣、让一步可以立根、斫教榿不妨封顶